

## 延慶本『平家物語』成親説話考（下）

——王権の道化としての成親——

朴 恩 姫

### 一、はじめに

『平家物語』に登場する藤原成親は、個性に富んでいる人物として描写されている。異常なほど左大将への昇進に執着したり、見事に猿樂を演じ座中を笑わせたり、捕縛後には清盛の前で涙を流し命を乞い、家族を思つて氣をもんだりするなど、陰謀の主謀者たる資質から子供思ひの父性に至るまで多様な性格が描かれている。そのバラエティに富んだイメージの中で一番印象強いのは、たぶん鹿谷山荘での猿樂と有木別所での無惨な死であろう。前稿で成親の怨靈化についての論文を書いたが、そこで成親は怨靈として顕れたものの、保元の乱の敗者であった崇徳院や頼長の怨靈の跳梁によって陰が薄くなってしまったと結論つけた。鹿谷陰謀の主謀者として配流され、異常な死を遂げ、怨靈として顕れた以上、読者は成親の怨靈に『平家物語』の世界を動揺させる〈冥〉の力を予想するはずである。しかし成親の怨靈は積極的に物語世界を乱すこともなく、いかにもあつてなく後白河院によって調伏され、物語から完全に姿を消してしまつたのである。

本稿では、その統編として、成親の怨靈が物語の構想に関わる〈冥〉の力になれなかつた理由について、彼が生きた〈頭〉の世界の分析を通して検討したいと思う。このような考察は、『平家物語』の人物造形論はその〈冥〉〈頭〉三元論の世界観に沿って行われてこそ十分な把握が可能だという認識にもとづいている。そのことについては前稿でもふれておいた。

鹿谷陰謀事件を始めとする成親関連記事を分析するに当たつて、特に後白河院という帝王の存在を視座に入れて考察し

たいと思う。というのは、従来の鹿谷陰謀事件に関する研究は、史実との落差、つまり成親を主謀者とする虚構をあまりにも素直に認めてしまつて、後白河院という存在についてはそれほど深く詮索してこなかったと思うからである。後白河院を中心とする院政対平家という構図が、成親対平家になつた時、欠落するのは他ならぬ後白河院という帝王の存在である。成親を鹿谷陰謀の首謀者に仕立てる背後には、後白河院の排除、というよりも後白河院の瑕疵の隠蔽という新たな問題が隠れているのである。ということ、〈題〉における成親の人物像を考える際、成親だけに焦点を絞らず、その欠落部分である後白河院にも目を配つて鹿谷陰謀事件を考察した方が、『平家物語』の始発部の構想に対してより豊かな解釈を導く可能性があると思われる。

## 二、平治の乱の成親像——『平家物語』『平治物語』の比較を通して——

『平家物語』における成親の人物造型は叙述内容に若干の差はあるものの、基本的な叙述態度は諸本にそれほど差異があるわけではない。そのためであろうか、従来実在人物である成親の虚構化という問題は、諸本の比較を通してというよりも、主に史的事実との比較、つまり左大将争い記事の虚構性や鹿谷事件の物語的再構成という方向で成されてきた。このような研究状況にあつて、歴史的事実である鹿谷事件の物語化、特に成親の虚構化を考える際、示唆に富んでいるのが平治の乱の成親造型の問題である。というのは、平治の乱の成親については、『平治物語』や『平家物語』のような物語を始めとして、『愚管抄』や『玉葉』などの公卿日記にも関連記事が見えており、またその成親造型の方向性がそれぞれテキストによって少しずつ違つているからである。つまり、平治の乱の成親の物語化は、『平治物語』という物語の枠を超え、『平家物語』の成親像とも関わつているので、二つのテキストの成親像を分析することは、鹿谷事件にかかわる成親を考察する際重要な鍵になるといえる。

平治の乱は成親が生涯に巻き込まれた四回の大きな政治的事件の一つである。藤原信頼と源義朝の反乱側に与した成親は、官軍に敗れ、官軍の総指揮官である清盛により死刑にされるところだったが、重盛の助命により一命をとりとめる。

『平家物語』にみえる平治の乱関連記事の半数を占めているのは、成親関連記事であるが、それは成親が平治の乱と鹿谷事件の両方に関係している人物であることによるものである。平治の乱と鹿谷事件といえは、成親ばかりでなく、清盛と

重盛も同じく関わっており、しかもこの三人は二つの事件で同じ役柄を演じている。つまり成親は謀反を起こして敗れた人として、清盛は謀反を鎮圧し、謀反に加担した成親を断罪する立場の人として、また重盛は成親の命を救おうとする人として登場しているのである。平治の乱の成親像と鹿谷事件のそれがオーバーラップされやすいのも、成親・清盛・重盛の同じ役柄によるところが大きいといえる。では、まず『平家物語』のなかに語られている平治の乱の成親について考察してみよう。

『平家物語』のなかで平治の乱と成親との関わりについてはじめて口にするのは清盛である。多田藏人行綱の密告により鹿谷陰謀のことを知った清盛は、関係者を逮捕し、陰謀の全貌を明らかにし処罰するが、その主謀者である成親との対面の中で平治の乱について次のように語る。

一年、平治ノ逆乱之時、信頼、義朝等ニ御同心マ(ツ)テ、朝敵トナリ給タリシ時、越後中将トテ、嶋摺ノ直垂、小袴キテ、折烏帽子引立テ、六波羅ノ馬屋ノ前ニ引スヘラレテオワセシカバ、罪ニ定テ既ニ被誅給ベキニテオハセシヲ、内府トカクシテ申有タリシカバ、『七代マデノ守ノ神トナラム』ト、手ヲ合テ泣ク々宣シ事ハ忘給タルナ。

(一一七―一二八頁)

右の引用で清盛は、重盛の嘆願があったからこそ成親が今まで生き延びることができたことを強調し、今回の事件と結びつけて成親の忘恩の行為に怒りを表している。成親と重盛の私的な関係は有名で、成親の妹は重盛の妻にあたり、成親の娘は惟盛の妻にあたるという二重の姻戚関係を結んでいた。成親の罪が死罪に処すべきものであること、重盛の嘆願によって斬首に処しなかったこと、そしてその時の成親が発した喜びと感謝の言葉を引用して、成親の平家打倒計画が忘恩の行為であることを強調しているのである。

この清盛の回想は当然のことながら、『平家物語』のなかに見えている。諸本によって内容が少し違うので、まずは『平家物語』諸本のなかで古態性を残しているとされる学習院大学本をみてみよう。

すでに死罪に定りけるを、左右衛門佐重盛、「今度の重盛が勲功の賞には、越後中将を申しあづかり候はん」と、た

りふし申されたりければ、死罪をば申しなだめられてけり。此成親は、院の御気色よき人にて、仙洞の事は内外共に沙汰する仁なりけるが、重盛出仕の時は、毎度、情をかけて申承るよしなりけるが、今度たすけられてけり。されば、「いかにも人は、心あるべかりけり」とぞ、人毎に申ける。

右の引用に見られる勲功として成親の身を預かりたいという重盛の申し出は、表現は違うものの、重盛の嘆願によつて成親の処刑が行われなかつたという『平家物語』の叙述と同じ内容だと言える。しかし右の引用で注目すべきところは、場面叙述の後、この出来事に関する語り手の解釈が語られている部分である。重盛が成親の命を救つた理由として第一に挙げられているのは、後白河院の寵臣であるという成親の政治的な位置である。第二には、重盛が後白河院の御所に仕出していた時、成親が院中における作法についてあれこれと気配りをし、後白河院と平家との仲介の役を果たしたということである。このような成親の普段の配慮が平治の乱の重盛の嘆願に繋がつたと語り、「いかにも人は、心あるべかりけり」という世評をもつてこの出来事の結論としている。このような叙述からは、院庁の政務や院政と宮中との関係を才氣豊かにとりしきるとともに、当時の新興勢力である平家の潜在能力に早くから気づき、院との仲介の役をはたしている院近臣たる成親の先見の明がほの見えているといえる。

『平治物語』のなかで語られている成親の政治的な位置、院近臣としての手腕といったものは、『平家物語』の平治の乱に関する叙述の中では見られなかつたものである。このような有能な院近臣としての成親像は『愚管抄』にも見える。

院ノ男ノオボヘニテ、成親トテ信頼ガ時アヤウカリシ人、流レタリシモ、サヤウノ時ノ師仲マデ、内侍所、又カノコイトリタリシ小鈎ナド持テ参リツ、カヘリテ忠アル由申シカバ、皆カヤウノ物ハメシカヘサレニケル。コノ成親ヲコトニナノメナラズ御寵アリケル。

右の引用は鹿谷事件を語る部分で、慈円は成親を紹介するにあたって、まず平治の乱後の彼の院近臣としての活躍を語っている。師仲は平治の乱に深く関わっている人物で配流に決まっていたが、成親は師仲が藤原信頼から奪い取つた内侍所や小鈎を持つて後白河院のもとに参上して師仲の返り忠の功を進言し、院への師仲の再出仕を可能にさせたと慈円は叙述

している。成親の政治的な周旋の手腕が発揮された一例であるといえる。したがってその人物評価は『平治物語』に近いといえる。

『平家物語』と学習院大学本『平治物語』は、同じ歴史の一齣を語っているにも関わらず、成親造型の方向性は全く違ふ。『平家物語』の叙述には、院と平家の間を巧みに仲介したであろう有能な院近臣としての姿は見当たらない。また「心ある人」という彼の人柄に対しての肯定的な評価は捨象され、清盛や重盛といった官軍の前で萎縮し、命乞いに汲々とする姿だけが浮き彫りされている。院近臣としての手腕は捨象され、重盛との私的関係だけが強調されている。『平家物語』の成親像の特徴のなかに、どのような物語的意図がはたらいっているのか、以下『平家物語』の鹿谷陰謀事件関連記事の分析を通して考察してみよう。

### 三、鹿谷陰謀事件の導火線——左大将争いをめぐって——

『平家物語』の鹿谷事件は、有名な成親の左大将争いから始まる。歴史的な事件である鹿谷事件の物語化の問題を議論する際もつとも注目を浴びてきたのは、鹿谷事件の発端とされるこの左大将争い記事である。というのは、歴史研究での鹿谷事件と『平家物語』が語るそれとの大きな差異が、左大将争いという虚構的事件のなかに存在しているからである。院政期の歴史研究では、鹿谷事件の根底には外戚化による家格の確立を目指す清盛と、院政の強化を目指す院・院近臣との従来からの政治構想に関する矛盾が伏在していたと論じられている。それに対して『平家物語』では、清盛と院政政権との対立という政治的な文脈は薄められており、代わりに成親の個人的な反平家感情が浮き彫りにされている。左大将争いに関する先行研究は、院政期史料の分析を通して記事そのものの虚構性を証明することはもちろん、物語内での虚構の意味を追求する方向でも多様な角度でなされてきた。この節では、左大将争い記事が物語内で果たしている役割を追求する以前の段階として、左大将争い記事での成親人物造型の特徴を、前節の平治の乱に際して院近臣として有能ぶりを示した成親像とのずれに注意しながら考察したいと思う。

まず左大将争い記事のあらすじを見てみよう。左大将争いエピソードは、内大臣兼左大将であった藤原師長の太政大臣昇進による辞任から始まる。空いた左大将のポストに、当時一の大納言であった藤原実定をはじめとして様々な人々が期

待をかけるが、その一人として登場するのが成親である。

後徳大寺ノ大納言実定、一ノ大納言ニテ御坐ケルガ、理運ニ充テ可成給之由聞ケリ。其外、花山院ノ中納言兼雅卿モ所望セラレケリ。殿三位中將師家卿ナド申、御年ノ程ハ無下ニ少ク御坐セドモ、成給ハムズラムト、世間ニハ申合ケル程ニ、故中御門中納言家成卿三男、新大納言成親卿、平ニ被申ケリ。院ノ御氣色ヨカリケレバ、様々ノ祈ヲ始テ、サリトモト被思ケリ。(一八四頁)

右の引用で左大将候補者として登場する、後徳大寺大納言実定、花山院中納言兼雅、殿三位中將師家は、それぞれ「一ノ大納言」、清盛の娘婿、当時の摂政基房の子息であるなど、左大将を期待できる家柄の人々である。しかし成親だけは、大納言に至ったことさえも先途を超えた出世だと繰り返し語られているように、決して左大将を所望するにふさわしい家柄ではなかった。それにもかかわらず、成親が左大将に期待をかけることができたのは、「院ノ御氣色ヨカリケレバ」かわかるように、後白河院の寵愛があつたからである。引用では、まず後白河院の寵愛を受けている院近臣としての造型に注目すべきである。

成親が後白河院の代表的な院近臣であつたことは、『玉葉』や『愚管抄』の記事などで確認できるが、ここで大事ななのは『平家物語』内での院近臣のイメージであろう。『平家物語』は後白河院政期の院近臣について所々で語っているが、その焦点になつているのは、ほとんど彼等の過分な振る舞いである。特に院近臣に属する北面の武士の由来について語っている記事(第一本二十三)は『平家物語』の院近臣に対する基本的な視線を表している。この記事では、北面が白河院の時始めて置かれたことや、歴代有名な北面の武士についてふれて、白河・鳥羽院政期の北面の武士と当代のそれとを比較している。それによると、「身ノ程ヲバ振舞」う以前の北面の武士に対し、当時の北面の武士は「事外ニ過分シテ、公卿、殿上人ヲモ物トモセズ、礼儀モ無」と批判している。受領階層、あるいは上下の北面の武士から成る院近臣が公卿や殿上人を侮る振る舞いをするということは、すなわち王朝の身分秩序を乱すことを意味し、さらには世の乱れにもつながるものだと『平家物語』は語っているのである。『平家物語』は驕れる心をもって世間を騒がす北面の武士の典型的な例として西光・師高父子を紹介し、以下白山事件を語ることになる。成親もまさにこのような「驕れる院近臣」の典型的

な例として登場しているのである。

ところで『平家物語』で語る「驕れる」や「世の乱れ」といった言葉の根底には、天皇（院）・摂関家を頂点とする旧体制、すなわち王朝政治体制的な考え方が潜んでいることを見逃してはならない。院近臣の行為は、あくまでも旧体制側の人が見たときに「驕れる」行為になり、「世の乱れ」の原因になるのである。時代はもはや院政期に入っていて、院近臣は院政を支える権力機構を實質的に担っている。それにも関わらず、『平家物語』はそのような新しい時代の変化を無視するかのように、旧秩序の中で彼等の行動を価値判断し、秩序の破壊者として位置づけているのである。成親が背負っている否定的なイメージの大半は、天皇・摂関を中心とする旧体制の価値基準によるものであることを、まず念頭に置く必要があるだろう。

次に左大将争いエピソードで注目すべきことは、成親が行った三つの祈誓である。後白河院の寵愛を背景に左大将に望みをかけた成親は、望みを叶えるために仏神の力にすがろうとする。一番目の祈誓では、ある僧を石清水八幡宮に籠もらせ、大般若経を真読させたが、大菩薩の使者である鳩二羽が、瓦大明神の前にある橘の木に飛んできて互いに食い合つて死ぬという不思議な事件が起こる。二度目は成親自身が賀茂の上社と鴨御祖社に徒歩の参詣を百回するが、「サクラ花賀茂ノ河風ウラムナヨチルヲバエコソ留メザリケレ」という神歌が詠まれる夢を見る。三度目は上の社と下若宮にそれぞれ僧を籠もらせ、真言秘法や吒呎尼天の修法を行わせるが、大雨が降り雷が神殿に落ち、結局若宮社が焼けてしまうことになる。

出世のために寺社に参籠し祈禱することは、歌人の藤原定家の日吉社信仰<sup>①</sup>の例からも窺えるように、院政期の貴族の重要な行事の一つであつて成親固有のものではない。成親の三回の祈誓で注目すべきことは、祈誓そのものよりも、むしろ祈願が成就できないという仏神の答へと、それにも関わらず諦めない成親の姿であろう。鳩の死や夢告、天変地異のようなさとしにもかかわらず、成親は左大将に対する執着心を棄てず、ついには鹿谷陰謀事件を引き起こすことになる。ところで、この三つの祈誓の話は「神ハ非例ヲ稟給ハネバ、カ、ル不思議出来ニケルニヤ。成親卿、是ニモ思知ザリケルコソ浅猿ケレ」という語り手の批評をもつて締めくくられている。「非例（礼）」であるから、つまり成親の祈願が（自分の望み）であるから、神はその祈願を受け入れることができないということである。前にもふれたように、「非例」という言葉のなかにも王朝的な価値観が投影されている。つまり王朝的な秩序からはみ出す人間が、官職の昇進という形で王朝的

な秩序の中に入り込もうとすることを、王朝体制の擁護神と信じられた八幡大菩薩や賀茂大明神が固く拒否しているという三つの祈誓から読みとるべきではないだろうか。

ところで、「是二モ思知ザリケルコソ浅猿ケレ」という言葉は、先行研究でそれほど注目されてこなかったが、成親の人物像を考える際新しい意味をもっている大事な言葉であると思われる。というのは、三つの祈願のポイントは、身分不相応の官職を祈願したが成就できなかったという事柄そのものにあるのではなく、神の意向を伝えるしるしを受けたにもかかわらず、その意味を悟ることができなかった成親の悲劇にあるからである。つまり右の言葉は、以後の成親の悲劇を暗示していることはもちろん、成親が悲劇に落ちるしかない重要な要因として、神のさととしての神意を読みとることのできない暗愚性を指摘しているのである。院政期における国家体制は、〈顛〉の人間世界の秩序であるとともに、〈冥〉の仏神がすでに納受している秩序である。したがって、体制の変革あるいは破壊は仏神による神意と深く結びついているのである。それゆえに神意を読みとれないということは、すでに致命的な欠陥であったのである。

〈冥〉のさとにも気づかず、平家打倒に踏み切った成親に結果として与えられたのは、体制からの放逐としての配流であり、辺境である有木の別所での死である。『平家物語』には備前国への配流という〈顛〉の出来事の動因として二つの〈冥〉の力を紹介している。嘉応事件の山門の衆徒たちの呪いと州浜殿関連記事の住吉大明神の「祟り」がそれである。二つの事件は共に成親の〈驕れる行為〉が原因になった事件である。しかしこの二つの出来事と備前国の配流を結びつけるには、あまりにも時間の間隔が大きすぎる。特に応保三年の州浜殿での出来事は十七年前のことにも関わらず、「無幾程シテ備前国ノ配所ヘ下ラレケル」と語り、十七年という時間を無視するかのようになり、配流と住吉大明神の祟りを結びつけようとしている。言い換えれば、成親の政治的な行為の結果である備前国の配流と死に、意図的に〈冥〉の罰としての性格をかぶせようとしているのである。成親説話に潜んでいるこのような罪と罰のテーマについては美濃部重克がすでに指摘しているが、ただ罪と罰の基準になっているのが王朝的秩序であることについてはふれていない。

成親は八幡大菩薩や賀茂大明神のさとにも気づかない暗愚な人物、自らの〈驕れる行為〉により人や神の怒りを買う人物として造型されているが、その造型の背景には王朝の秩序から逸脱する人間として位置づけようとする物語の意図があったことが、考察を通して明らかになった。院近臣としての活躍ぶりに焦点を合わせたのが、『平治物語』の成親像であるのに対し、院の寵愛を背景に従来の身分秩序を壊そうとすることに『平家物語』の成親像のベースがあるといえる。



つまり成親の〈驕れる行爲〉が、左大将争い記事の語りたところであつたため、『平治物語』などに見られる政治的な手腕などは、全く叙述の対象にならなかつたのである。〈驕れる院近臣〉という成親像に見える否定的なイメージは、そのまま鹿谷陰謀事件の否定的な位置づけに繋がるものであるといえる。

#### 四、成親のヲコの側面——鹿谷山荘での猿楽を通して——

平家一門の専断で左大将の本望を遂げられなかつた成親は、密かに武器を集め、院近臣や北面の武士を中心に平家打倒計画を具体化してゆく。こうして成親を中心とした院近臣たちは、俊寛の山荘があつた鹿谷に集まり、平家追討の談義をすることになる。その密議には後白河院も時々参加し、また謀議の後には俊寛の主催で酒宴が行われたが、猿楽はこのよな密議の後の酒宴での出来事として特記されている。猿楽の場面は諸本に見えるが、猿楽を演じる人や猿楽の内容は諸本によって違い、康頼の一人芝居のように書かれたテキストから、康頼、成親、西光、俊寛を登場させ、より劇的に構成している語り系諸本に至るまで、多様なバリエーションが存在する。

延慶本の成親がシテの位置を占める猿楽は、後白河院が平家打倒の計画について静憲法印に意見を請うところから始まる。静憲法印の反対意見に怒つて成親が立ち上がり、狩衣の裾に引つけて瓶子を倒してしまう。この不意の事態に、これまでの気まずい雰囲気を一掃するかのように、成親と康頼の間で瓶子と平氏を語呂合わせにした猿楽の問答が交わされることになる。この猿楽の場面ではまず酒宴の構図に注目すべきである。つまり後白河院、成親、静憲法印に代表される三つのグループの人々によってストーリーが展開されているということである。成親は平家に恨みもち、平家打倒の計画に参加した院近臣の代表として、また静憲法印は成親の意見に反対する当代の識者の代表として登場している。それに対して後白河院は静憲法印に意見を請うことによって二つの意見の対立を可視化する存在で、平家打倒計画に対する立場は表明されていない。

成親の人物像を考察する際重要な意味を孕んでいるのが、対立人物として登場している静憲法印の「万事思知テ振舞人」としての造型である。信西の子息である静憲法印が、その学識や人柄の傑出により後白河院や清盛といった当時の権勢者の相談役として重用されたことは、『愚管抄』の叙述からも窺える。静憲法印は、すべてのことをよくわきまえてからお

もむるに行動する慎重で思慮分別のある人として造型されている。そしてその静憲法印によって、今回の謀議の正当性に疑問が投げかけられ、無謀さが危惧されるのである。静憲法印は、まず今まで清盛が朝廷で果たしてきた役割、つまり保元の乱や平治の乱のような危機的な場面で何度も朝敵を平定して、院政を武力という面でサポートしてきたことを力説する。そして大事な問題を軽々しく口にするに警戒を表明する。静憲法印の発言により、謀反を起こそうとする成親の行動は、事態の重大さや政治的状況への洞察を欠いた軽率なものとして浮き彫りにされることになる。

もう一つ鹿谷山荘での密議の場面描写の特徴として指摘できることは、成親と静憲法印の意見の対立が可視化された次の段階において、政治的な密議の場が芸能の場に転換されてしまうということである。瓶子をめぐっての猿楽がそれである。

法皇、「アレハ何ニ」ト仰有ケレバ、「不取敢平氏スデニ倒レテ候」ト、被申タリケレバ、法皇御エツボニ入セオハシマシテ、「康頼參テ当弁仕レ」ト仰アリシカバ、康頼ガ能ナレバ、ツイ立テ、「凡近来ハ平氏ガ余リ多候テ、モテエヒテ候」ト申タリケレバ、成親卿、「サテ其ヲバイカゝスベキ」ト被申。康頼、「ソレヲバ頸ヲ取ニハ不如」トテ、瓶子ノ頸ヲ取テ入ニケリ。法皇モ興ニ入セ給テ、着座ノ人々モエミマゲテゾ咲ハレケル。静憲法印バカリゾ、浅猿ト思テ、物モ宣ハズ、声ヲモ被出ザリケル。

(七〇―七一頁)

場の雰囲気察して、成親の怒りの行動を抑えようとする後白河院に対して、その意向に応じた成親は「瓶子」を「平氏」にかけ、「とりあえず平氏が倒れました」と答える。それは後白河院の意にかなうものであつたらう。成親の当意即妙な「開口」に興じた後白河院の命令により康頼が「答弁」をし、二人は平家追討計画の成功を前もって宣言する内容の即興の猿楽を披露する。

猿楽は元々は中国から伝来された俗楽であるが、保元のころから登場した「侍猿楽」の影響で、引用でみられるように、殿上人の酔酔など宮中の饗宴の席で貴族たちが猿楽まがいの所作や寸劇をいわば隠し芸のように演じてみせるようになった。滑稽を旨とする猿楽は、鎌倉前期までは単なる物まねから秀句や利口といった言葉の芸、乱舞に至るまでの様々なわざを内包して流動したが、大きく「ヘラコの詞」と「サルゴウの態」に分けられる。右の引用の成親と康頼による「開口」「答弁」は「ヘラコの詞」に当たり、「サルゴウの態」というのは乱舞のような歌舞の芸に近いものを指す。成親はおかし

いことを言い、人々を笑わせる芸を演じたわけであるが、猿楽で演じられる面白くてかつおかしい言葉や行為は、場合によつては辛辣な諷刺あるいは寓喩をも孕んでいて、相手の怒りを買う場合もあった。成親の猿楽もまさにそうであつて、味方の好評を得る反面、平家側の人の耳に入ると激怒を呼ぶに違いないものである。ヘラコはおかしいことを言い、人を笑わせる人の意味の他に、ヘラコノモノと言つたとき、気ままで専横な、しつつけの悪い無法者を意味する。成親は身分不相応の左大将に執着し反平家陰謀を計画する驕れる院近臣という意味ではヘラコノモノであり、当意即妙のことをいつて人を笑わせるヘラコであるといえる。

ところで、ここで成親の機知に富んだヘラコの言葉が他ならぬ静憲法印の眼を通して語られていることを想起する必要がある。静憲法印の言葉に対する反発をきつかけに始まつた猿楽は、笑いを通して一座に連帯感を与えたはずである。しかし延慶本の叙述の焦点は皆が感じたはずの一体感にあるのではなく、政治的にきわめて困難な、あるいは不可能ともいつてよいような謀議を芸能の場に変えてしまふ、その行為自体にあるのである。この場の猿楽は「平氏」と「瓶子」という同音異義語を利用して、目の前で瓶子が転がっている状況に平氏の打倒を重ね合わせる言葉の芸である。平氏という権力集団と瓶子という器物はまったく異なる実体である。それを「ヘイシ」という言葉で同質化し、「ヘイシ」が倒れたという事態をもう一方の「ヘイシ」の打倒の予兆へと結びつけて行く。こうしてきわめて難しい謀議はいかにも安易なことであるかのように見せかけられ、その虚偽性は笑いによつて隠蔽される。しかし猿楽のこのような仕組みは、呆れた顔で騒ぎを見ている静憲法印の焦点化によつて破綻をもたらす。つまり静憲法印の視線の導入によつて、読者は成親の言葉のトリックに同化することなく、言葉と現実の転倒を批判的な姿勢で見つめられるのである。

平家の政権を転覆するために東奔西走している成親と冷静な状況判断をもつて今回の計画に反対している静憲法印との対立を通して、鹿谷山荘での密議を語っていることは、延慶本の著しい特徴である。もちろん諸本によつては、四部本や源平盛衰記のように静憲法印が登場しない本もある。おもしろいことにも、これらの本では静憲法印の名前が見えない分、猿楽においての成親の役割も縮小されている。盛衰記の場合は、言葉の芸から少し離れて、物まね的な動作が強調されていて、康頼の猿楽にまつわる逸話としての性格が色濃く残つているといえる。盛衰記の物まね的な猿楽では、康頼の役割が成親より一層目立っている。四部本も「開口」に当たる成親の言葉は見えず、転がっている瓶子を見て康頼が即興的に一人で芸を披露した事になつている。盛衰記や四部本と延慶本の猿楽の場面を比較して見ると、静憲法印の登場の有無と

猿樂での成親の比重が運動していることがわかる。

大胆でかつ機知に富んだ猿樂の芸は、成親の主謀者たる資質を語る一方、静憲法印のあつげにとられた視線を導入することによって、鹿谷陰謀そのものももっている軽々しさを表面に浮かび上がらせる役割を果たしている。特に左大将争い記事にみられる〈私憤〉というモチーフと相まって、鹿谷陰謀は政治的謀議としては正当性の乏しい、成親を中心とした個人的な集まりの域を出ないものとして印象づけられている。この二つの特徴、すなわち〈私憤〉というモチーフと猿樂は、成親を鹿谷陰謀の主謀者として位置づけ、物語の焦点を成親の言動に集中させることで、陰謀のマイナス的側面、言い換えれば陰謀の無謀性の責任をすべて成親一個人に収斂させているといえる。

今まで主に成親と静憲法印の対比を中心に猿樂の場を分析してきたが、ここで話を前述した三つの分類に戻して、後白河院という存在を中心に猿樂の場をもう一度考えてみよう。『玉葉』のような同時代の記録や後白河院の指示によって鹿谷陰謀が計画されたとはつきり示している『六代勝事記』<sup>21</sup>などの叙述から、『平家物語』が書かれた時代に鹿谷陰謀事件に対する後白河院の積極的なかわりを表す言説があったことは想像にかたくない。にもかかわらず鹿谷山莊の密議という一番大事な場面でさえ、静憲法印と成親のやり取りが前景化し、後白河院の陰謀に対する立場をうまくぼかされている。猿樂を見ている後白河院は、その場にながら鹿谷陰謀と積極的な結びつきをもたないまま、一人の傍観者になっているといえる。次節では、この問題を含めて鹿谷陰謀事件における後白河院の位置や成親との関係に焦点を合わせて考察することにする。

##### 五、後白河院と鹿谷陰謀事件

鹿谷陰謀事件における成親の人物像は、陰謀発覚を境に以前と大きく変ることになる。つまり、異常な執着心や、鹿谷山莊での激怒のような陰謀の主謀者たる資質は、以後全く見あたらない。代わりに清盛の前に萎縮する姿だけが強調されている。このような成親像の変貌について春田宣は、陰謀発覚後の成親の性格について「当時貴族が通じてもつ性格」だと説明し、平氏という強大勢力との直接対決では、政治的かけひきに明け暮れる院近臣としてはなすすべがなかったと論じている。しかしこのような成親像の変貌は、院近臣としての成親個人の性格の問題としては片づけられない。『平家物

「語」の構想にかかわる大きな問題を孕んでいるといえる。というのは、成親だけではなく後白河院を含めて、人物像の変貌によって鹿谷陰謀事件自体の位置づけが『平家物語』の中で変わっていくからである。成親像の変貌は、むしろ鹿谷陰謀事件に対する語り手の姿勢の変化のなかでとらえるべきではなからうか。

『平家物語』の鹿谷陰謀事件は、左大将争いという虚構を取り入れることによって、成親主導の陰謀として仕立てられていることについては、すでに言及した。主謀者成親という虚構は、後白河院と鹿谷陰謀事件との直接的な結びつきを薄める役割を果たしているが、このような意図は諸本に共通して見えるものである。特に『四部本』や『源平盛衰記』では、鹿谷山荘の密議に後白河院は登場さえしていない。しかしこのような鹿谷陰謀と後白河院との関連を曖昧にする『平家物語』の姿勢は、多田藏人行綱の密告を境に変わることになる。というのは、行綱と清盛の会話を通して、鹿谷陰謀の黒幕としての後白河院の存在が物語の前面に浮き彫りにされるからである。

入道大ニ驚テ宣ケルハ、「保元平治ヨリ以来、君ノ御為ニ命ヲ捨ル事既ニ度々也。人タイカニ申トモ、キミ君ニテ渡ラセ給ハ、争カ入道ヲバ子々孫々マデモ捨サセ給ベキ。乍恐君モクヤシクコソ渡ラセ給ハムズラメ。抑此事ハ院ハ一定被知食タルカ」ト宣ケレバ、  
(一一三頁)

右の引用は行綱の密告を聞いた清盛の反応が描写されている所である。清盛はまず自分が朝廷で今まで果たしてきた役割を強調し、自分を裏切った後白河院の態度に恨みを表している。ここで大事なのは清盛の恨みの対象が成親ではなく、後白河院であるということである。清盛は、院近臣がどのような讒言をしても、後白河院は自分を信頼し擁護すべきであると語り、後白河院が密議のことを本当に知っているかどうかもう一度確認する。後白河院がどれほど深く関わっているのが清盛の一番の関心事であったわけである。今まで鹿谷陰謀事件の主謀者として語られてきた成親の存在などはもはや清盛の眼中にはないのである。この問いに行綱は「子細ニヤ及候。大納言ノ軍兵被催候シモ、院宣トテコソ催サレ候シカ」と答え、院の全面的な加担を認める。「院宣」によって成親が兵を集めたという叙述は、西光の口を通してもう一度繰り返される。「院宣」がいかなる形で出されたのかは問題になるが、後白河院と鹿谷陰謀事件との関係が急に緊密になったことには変わりがないだろう。

事態の緊迫さを知らされた清盛は、まず院の御所に使者を派遣し、行綱の言葉が事実かどうかを確認する。この場面での後白河院の反応は、諸本の間で微妙な差異を見せており、それについては早川厚一の詳しい研究がある。氏は特に延慶本について、鹿谷事件は成親の私憤に始まる謀議という当初の構想から、後白河院の画策によるものに移り変わったと指摘し、それに伴って成親の卑小化が見られると論証している。鹿谷陰謀における後白河院の役割を強調すればするほど成親の役割が縮小されるのは当然のことであろう。

ではなぜ今までの論理に矛盾を起こしてまで後白河院の参加ということをやき彫りにする必要があったのだろうか。あるいはなぜ左大将争いという虚構を動員してまで成親を鹿谷陰謀の主謀者として作り上げる必要があったのか。この問題を考える際重要なのは、鹿谷陰謀における後白河院の浮上と清盛の登場が同時的になされているということである。つまり、物語が〈非分の望み〉や〈私憤〉といった院近臣成親の振る舞いにあてていた焦点を、院までもないがしろにする清盛の振る舞いへと移転させていったのである。平家打倒計画の全貌を聞いた清盛は、陰謀に関わった院近臣らを逮捕・処罰するばかりではなく、後白河院を鳥羽殿か西八条に幽閉しようとする。関連者をいくらか逮捕しても、後白河院を北面の武士や院近臣と隔離しないと、いつでも平家追討の院宣を出すに違いないと判断したからである。清盛は「朝敵ト成ナム後ハ、悔ニ益有マジ」と思い、後白河院を相手に戦かおうとする。後白河院の幽閉にともなう北面の武士との武力衝突を仕方ないと思ひ、「大方ハ入道、院方ノ宮仕切タリ」とまで断言するのである。事態はもはや成親個人の恨みのレベルではなくなったのである。院の存在までないがしろにする一連の処置において清盛は、まさに序章以来語られてきた〈奢れる者〉の代表としての姿を見事にみせているといえる。黒幕としての後白河院をクローズアップすることは、鹿谷陰謀事件を単なる〈私的〉な出来事から〈公的〉な出来事へと捉え直すことを意味する。すなわち鹿谷陰謀事件に内在している対立構造が、今までの成親対平家から院政対平家に変わることを意味する。後白河院を含め、院近臣を清盛の横暴の犠牲者として設定し直すことよって、〈驕れる者〉としての清盛像はあらためてはつきり姿を現すのである。

ところで、このような清盛の悪行に関する関心は、前後の文脈なしに突然現れたものではない。周知のように「盛者必衰」の理を解いている序章以来、栄華の絶頂に達した平家の滅びの原因として、平家の悪行は常に注目されてきた。しかし、代后や額打論など、末代の不安な社会に物語の叙述の焦点が移ってからは、清盛の悪行自体に関する関心が薄まったのも事実であろう。清盛の悪行が本格的に物語の焦点になったのは、「平家ノ悪行ノ始」「世ノ乱ケル根元」と言われる殿

下乗合事件以後だといえる。左大将争い記事はこの殿下乗合事件の後に配置されている。『平家物語』諸本は「その時」「其の比」という言葉で左大将争い記事を語り出し、二つの事件はまるで並行する時間のなかで起こったかのように語られている。しかし実際は、殿下乗合事件と師長の左大将辞任との間には六年の隔りがある。この点について富倉徳次郎は、説話の集積と歴史語りが混在している『平家物語』の特徴の反映であると説明している。しかし六年という歳月の無視を、説話と歴史語りの混在の偶然の結果として納得するには、物足らなさを感ずる。

二つの逸話の関係を考える際、示唆に富んでいるのが長門本の存在である。長門本は「その時」に当たる言葉がなく、独自異文で二つの話を結びつけている。

妙音院の入道太政大臣の、内大臣の右大将にておはしましけるか、もとより出家の御心さしありける上、入道相国、年をへ、日にしたかひて、過分になりて、天下の事を、わかまゝに執行し、重盛を大将になしたるうへ、次男宗盛を大将になさんと心にかけて、其闕を伺ふよし、聞せ給ひける。おりふし松殿、かく事にあひ給につけても、「一定、大将は、かれなんす」とおほしめして、急ぎ大将をしたひ申されけるを、

引用は左大将争いのきっかけになった師長の左大将辞任について語る部分である。諸本が左大将辞任を太政大臣の昇進と関連づけて説明しているのに対して、長門本は日頃の平家の専横、特に殿下乗合事件と関連づけて説明している。清盛が摂政基房に恥をかかせた事件と清盛が院近臣を独断で配流・処刑した事件を平家の悪行という共通点をもつて語ろうとしているのが右の引用から読みとれる。しかも悪玉清盛と善玉重盛という役柄は、二つの逸話を接合しやすくしている。清盛の専横を前面に出して左大将争いの導入部を書いているのが長門本の特徴であると言える。

このように解釈してみると、二つの事件を「その時」「其の比」と語り出している諸本の意図が類推できる。つまり『平家物語』は二つの逸話を結びつけ、鹿谷事件における清盛の専横を強調するために、六年の歳月をあえて無視したのである。実際左大将争い記事は、今まで述べたように成親の「驕れる行爲」を語る一方、人事においての清盛の独断ということをも強調している。撰録の子息でもない重盛と宗盛が左右の大将に並んだことは歴史上始めてのこと（一本五）で、平家の栄華ひいては旧秩序を乱す清盛の専横の象徴として描かれている。言い換えれば、左大将争い記事は成親と清盛とい

う二人の〈驕れる行爲〉を重層的に語っているといえる。

清盛の行動が物語の焦点になった後、清盛の悪行を強調するために、院近臣の求心点として後白河院の存在が強調され、鹿谷陰謀も公的な計画として語り直された。それにしたがって成親も陰謀の主謀者から院近臣の一人に格下げされる。左大将に対する執着によって陰謀を計画し、猿楽を披露した成親は、失敗を含めた鹿谷陰謀のすべての責任をもって死んだのである。その代わりに、後白河院は鹿谷陰謀の責任を問われることなく、黒幕として依然と物語のなかで活躍することになる。言い換えれば、成親は失敗した陰謀の責任追究から後白河院を守るために犠牲になった生贖的な存在だといえる。

ここでなぜ政治的謀議での猿楽のような芸能の場面が必要であったのかを考えてみよう。後白河院は周知のように芸能好きな人であった。『愚管抄』や公家日記を借りなくても、彼の著書である『梁塵秘抄』をみると、後白河院がどれほど芸能に力を入れていたかがわかる。後白河院が今様ばかりでなく猿楽にも興味を示していたことは、『サルガウクルイ物』である康頼をいつも近く召し使ったという『愚管抄』の記事からも窺える。芸能はまさに後白河院を象徴する二本柱の一つである。その芸能の側面を物語内で代わり受けているのが、成親であるといえる。静憲法印の視線を通して語られる成親の秀句、康頼の答弁は、鹿谷陰謀の行方を象徴的にあらわすものである。後白河院の一部である芸能、すなわち猿楽を演ずることによって、成親はまさに後白河院の身代わりになり、鹿谷陰謀の〈負〉的側面を一身に背負って死んでゆくのである。

## 六、むすび

鹿谷陰謀は実行に移る前に味方の裏切りにより計画の段階で終わってしまった反平家運動である。規模の面でも、そして影響という面でも、頼政や頼朝の蜂起に及ばないが、『平家物語』の中ではかなりの量をもって語られている。それは歴史的事件としてより、物語内での事件としてもっと重要な意味をもっているからであろう。その主人公として登場する成親は左大将争いや猿楽をとおして陰謀の主謀者として仕立てられ、陰謀の〈負〉的な側面を背負う人物として造型されている。そのために、『平治物語』や『愚管抄』にみられる有能な院近臣といった肯定的な評価は捨象され、〈驕れる院近臣〉として、神のさとしを気付くことの出来ない暗愚な人物として創作されたのである。後白河院の代わりにすべての責



任を背負って死んで行く成親から、『平家物語』の皇統尊重の態度が読みとれるのではないだろうか。鹿谷陰謀の主謀者として活躍した成親が、死んで怨霊になって再登場するものの、『平家物語』を揺るがすほどの力を發揮することが出来ず、崇徳院や頼長の怨霊に影が薄くなってしまったのも、彼が王権の権威を守るためのただの道化でしかなかったからであるといえる。

## 注

- 本文中に引用した『平家物語』のテキストは、『延慶本平家物語』（北原保雄・小川栄一編、勉誠社、一九九〇）によった。
- (1) 朴思姫「延慶本『平家物語』の成親説話考（上）——怨霊譚を中心に——」（『日本語と日本文学』三二号、二〇〇〇年八月）。
- (2) 四回の事件は、平治の乱、応保元年の立太子事件、嘉応事件、鹿谷事件をさす。
- (3) 日下力「『平家物語』と『保元物語』——成親事件語群の考察」（『国文学研究』、一九八二年一〇月）。
- (4) 『愚管抄』巻五には、「フカ、ルベキ者ナラネバ、トガモイトナカリケリ」という叙述があり、成親が平治の乱にそれほど深く関わらなかつたとしている。
- (5) 栃木孝惟、日下力、増田宗、久保田淳校注『保元物語 平治物語 承久記』（新古典文学大系43、岩波書店、一九九二）二一五頁。
- (6) このような成親造型を可能にしているのは、信頼のヲコ化が背景にあるだと思われる。鹿谷陰謀の成親と『平治物語』の信頼の表現や造型の類似性については日下力の論文に詳しく分析されている。
- (7) 岡見正雄、赤松俊秀校注『愚管抄』（日本古典文学大系86、岩波書店、一九六七）二四四頁。
- (8) 『平治物語』では師仲自身が自分の無罪を満盛に訴える場面が見える。
- (9) 『平治物語』の流布本と言われている金刀比羅本の成親造型は、どちらかといえば、『平家物語』にほぼ近い。語り手の感想は叙述されず、むしろ成親を縛っていた縄をみずから解いてくれる重盛の恩愛と情愛深さが前景化されている。このような『平治物語』の変化には、鹿谷事件の成親、言い換えれば『平家物語』の成親像が影響しているといえるのではないだろうか。
- (10) 元本泰雄「院政期政治史研究」（思文閣出版、一九九六）三〇七頁。
- (11) 曾我良成「安元三年の近衛大将人事——『平家物語』と古記録のはざま——」（『名古屋学院大学論集人文・自然科学篇』第三卷一、一九九五年七月）。
- (12) 曾我良成の論文によると、当時の家格では摂関家や清華家の子弟でないと、左大将を望めなかつたという。
- (13) 速水侑「院政期の仏教」（吉川弘文館、一九九八）二八五頁。

- (14) 『愚管抄』では山莊の持ち主を静憲法印としている。この点について、梶原正昭は後の「足摺」の悲劇と関連づけるために山莊の持ち主を俊寛とし、その反面静憲法印を法皇側近の第三者として目撃者に仕立て上げ、その視点から一味の人々の狂態をやや批判的に描き出していると論述している。(『鹿の谷事件』武蔵野書院、一九九七) 一一〇頁。
- (15) 『愚管抄』は静憲法印を「萬ノ事思ヒ知テ引リツ、マコトノ人ニテアリケレバ」(巻五、二四四頁)と紹介しているが、このような静憲法印像は『平家物語』の「万事思知テ振舞人」いう造型と重なるものである。
- (16) 梶原、前掲書、一一〇～一一二頁。
- (17) 植木行宣「『能』形成前の猿樂——古猿樂能の再検討——」(『芸能史研究』二二号、一九七八年) 四頁。
- (18) 『長秋記』長寛二年七月二日に、苦住者を真似た猿樂が原因になって、延暦寺の学生と苦住者間で乱闘が起こったという記事がある。なお『長秋記』の記事に関しては、守屋毅の論文に詳しく紹介されている(『中世芸能の幻想』、淡交社、一九八五)。
- (19) 語り系諸本では、成親以外に康頼、西光、俊寛が登場し、密議の主立った加担者が猿樂を共演する形になっている。密議の成功を前もって宣言する一種の儀式的な場面になっているので、延慶本ほど成親に焦点が集中されてはいない。
- (20) 『玉葉』安元三年六月二日。
- (21) 朝恩にほこりて朝章をかるくし、万方をしたがへて万民をなやますに、後白河法皇、安元年中に大納言成親卿・西光入道等におほせて謀反をめぐらし給に、多田の源藏人がために、中言国をかたむけて、雲客月卿、地下北面おほく坐事(写削纂『六代勝事記』三弥井書店、二〇〇〇年) 六五～六六頁。
- (22) 春田宣「平家物語成親説話の構成」(國學院雑誌、昭和四三年九月)。
- (23) 早川厚一「成親説話の成立とその展開」(『名大軍記物語研究会会報』四、一九七四年四月)。
- (24) 富倉徳次郎「平家物語全注釈 上巻」(角川書店、一九六〇) 一五九頁。
- (25) 麻原美子・名波弘彰編「長門本 平家物語の総合研究 第一巻校注篇上」(勤誠社、一九九八) 八八頁。